社協活動最前線

横浜市・神奈川区社会福祉協議会

孤立死ゼロをめざして社協の働きかけで住民たちが自主的に動き出した「羽沢プロジェクト」

かながわブランド農作物「横浜キャベツ」の畑が広がる羽沢の象徴的な風景

神奈川区の羽沢地区では、住民主導による社会的孤立者への支援活動が動き出している。活動を担うメンバーの中心は、自治連合会・地区社協・民生委員といった地域の人たち。行政、地域包括支援センター、区社協ももちろん参加するが、あくまで支援機関という位置づけだ。地域の課題を自分たちの力で解決していくための活動について取材した。

社協データ

【地域の状況】（平成27年9月30日現在）

人　口	234,128人
世帯数	119,694世帯
高齢化率	21.4%

【社協の概要】（平成27年5月末）

理　事	11人
評議員	23人
監　事	3人
職員数	22人（正規職員9人、臨時職員13人）

【主な事業】

- 身近な地域での住民のつながり・支え合い活動の推進
- 幅広い福祉保健人材の育成
- 地域における権利擁護の推進、高齢者、障害者、子育て中の親、生活困窮者への支援
- 会員活動と地域福祉の推進
- 社協の発展に向けた運営基盤の強化

神奈川区社協の変化

横浜市神奈川区は21の地区に分かれ、それぞれが異なった表情をもっている。特に、海側と山側では自然環境も生活状況も大きく異なるという。このような状況の中、神奈川区社協では、平成24年度策定の地域福祉活動計画や、平成25年度に横浜市社協と18の区社協で策定した「長期ビジョン2025」などで、孤立世帯の増加や災害時の不安、地域福祉活動の担い手の不足といった課題に対して、より身近な地域で近隣による見守り、助け合いといった共助の取り組みを実施していくことを明らかにした。特に平成25年度からの「住民の支え合いマップづくり」をきっかけに、地域住民自身による地域課題への気づきを大切にすることで、住民の地域づくりに対する意識の高まりにもつながった。

また、これを機に、区社協としての姿勢にも変化があった。以前は、サロンの仕組みを広げるというような地区社協への支援活動が主で、個別のケースはあまり意識をしていなかった。しかし、支え合いマップの作成で、住民同士の関係づくりや、次世代の担い手の育成等の課題が見えてきたことで、課題の解決を住民に働きかけないといけないという思いが強まり、現在では各職員が個別ケースも意識しながら仕事に取り組むようになった。

「羽沢（はざわ）プロジェクト」が誕生した経緯

神奈川区の羽沢地区では、「助けられ上手なまち羽沢、助け上手なまち羽沢」と銘打った、孤立死ゼロをめざすプロジェクトがスタートしている。これは、生活上の課題を複数抱えている人たちを対象として、地域とのつながりをつくろうと住民たちが動き出した支援活動だ。神奈川区社協の梅木博志主事はプロジェクトが誕生した経緯について次のように語る。

「平成25年に地域包括支援センターのケースカンファレンスに参加してみると、羽沢地区には、生活上の課題を複数抱え、地域とのつながりもない人たちが相当いることがわかったのです。つながりがないので発見も遅れ、問題が深刻化している。一方で、羽沢地区は趣味の活動が非常に盛んで、参加している人たちが多いという別の側面もあります。このギャップを埋めない限り、羽沢地区の生活課題を抱える人たちは減らないし、個別の問題の重度化も防げないと考えました」

もともと団結意識が強い羽沢地区の人たちであったため、「生活課題を抱えている人たちを放置し続ければ、問題は深刻になるだけだ。排除するのではなく、参加してもらうことが結果的に地域のためになる」という呼びかけにすぐ反応し、羽沢プロジェクトがスタートすることになった。プロジェクトには、羽沢地区連合会、羽沢地区社協、羽沢地区民児協、地域包括支援センター、神奈川区役所、そして神奈川区社協からメンバーが選ばれている。

まずは現状分析を行うため、メンバーで実地調査

プロジェクトでまず始めたことは、地区の状況を把握することだった。羽沢地区社協の平山三郎会長は、「地区内に生活保護世帯の人たちが多いということは漠然と知っていましたが、実際にどれくらいいて、どのような生活を送っているかはまったくわかりませんでした」と語る。

羽沢地区には農地を転用して建てたアパートが非常に多い。しかし、市内中心部までの交通の便が非常に悪いため、家賃が安いにもかかわらず入居率が悪いという傾向がある。そのため生活保護世帯等の人たちが、羽沢地区のアパートを紹介されて入居するという。

そこでプロジェクトメンバーたちは地区の中でも特に「生活保護世帯等が多いと思われ、アパートが多数ある地域」を複数か所選び、そのなかのおよそ40世帯を訪問調査した。その結果、ほとんどの人が訪問しても対応してくれなかったという。身寄りがなく、地域に友人も知り合いもおらず、毎日お酒を飲みテレビを見て過ごす70代男性や、他人と関わることを極端に避けてトイレの小窓からしか対応してくれない70代女性のように、民生委員や地域包括支援センター職員の訪問さえ煩わしいと考えているような人たちが、羽沢地区に住んでいたことがわかった。

自分たちが楽しいと思えるイベント

調査の結果、その存在が明らかになってきた孤立した生活を送る人々。彼らを地域に誘い出すためにプロジェクトメンバーたちが議論した結果、まずは「あおぞら昼食会」と題する無料のカレーライスイベントを実施することにした。会場として選んだのは、孤立しがちな人々が多く住む地域。気になる人たちには参加を募るチラシを直接ポスティングしたほか、会場周辺の住民にも広く参加を募った。実験的に始めたイベントではあったが、予想以上の参加があった。

この結果について、羽沢地区自治連合会の岐部文明会長はこのように話す。

「ふだんはなかなか外出しない高齢者たちも、楽しそうな雰囲気につられて次々に集まって来ました。目と鼻の先に住んでいるのに『お久しぶり』という会話を交わしているのには驚きました。最近では近所の人たちでさえ、なかなか会って話をする機会がなくなっていますが、本当は周囲とのつながりを求めているんです。そのためにはまず、楽しく集うことが大切なんだと多くの人たちが理解してくれたと思います」

生活保護世帯等の人たちも少数ながら参加してくれた。障害年金で暮らす足が不自由な男性は、町内会未加入だった。しかし会場でゆっくり話してみると、本当は加入したい思いがあるとのことで、民生委員と班長が改めて自宅を訪問することになった。また、病気のためにアパートの外から出られないという70代女性は、カレーのにおいに惹かれて会場の様子を窓から眺めていた。その姿に気づいた和田勝巳・羽沢地区自治連合会副会長が、カレーを持って民生委員や地域包括支援センター職員とともに訪れ、様子を知ることができた。

「あおぞら昼食会」に続いて、次には「星空ビアガーデン」というイベントも開催した。お酒を飲みながら、孤立したり、課題を多く抱えている世帯の人たちの悩みを、もっとフランクに話してもらおうという試みだ。「自分たちが楽しいと思えるイベントでなければ、人は集まらない」という発想は見事にあたり、2回の開催で330名を超える人たちが参加している。特別な演出も音楽もない、単なる青空ビアホールに、地域の人たちがこれだけ多く集まったことの意義は大きい。

大切なのは、継続して活動を続けること

神奈川区社協としても、羽沢プロジェクトの成果は想像以上だったという。社協がやったことは、あくまでプロジェクトメンバーたちを焚きつけたことである。その後は、ほとんどをメンバーが自主的に発想し、企画をすすめていた。ビアホールというイベントも、住民主体だからこその発想であった。

今後の課題は、さらに多く人たちにイベントへ参加してもらうことだ。しかし、羽沢地区自治連合会の和田勝巳副会長は焦らず続けることが最も大切なのだと話す。

「プロジェクトはスタートしたばかり。大切なのは、継続して実施していくこと。彼らを外へ誘い出すのは、そんなに簡単なことではありません。簡単に出てくるような人たちなら、そもそも孤立なんかしないはずなのです。1回のイベントで、たとえひとりでも参加してくれたら大成功。それくらいの覚悟で続けていく必要があります」

人が集い、会話が発生していけば、自然と助け合いの精神も生まれていくはずではないか。プロジェクトメンバーたちは、そう考えている。生活に困難を抱えた人たちを「地域の見守り」によって支え合う仕組みづくりの基本は、人々が楽しく集うことなのだ。

また、プロジェクトの取り組みから、孤立していない人でも地域の交流の場がないことがわかり、新たなサロン活動のスタートとなったり、専門職が対応する個別ケースに住民が見守り支援で関わるような取り組みも生まれている。

羽沢地区で生まれたこのような活動を、今後、他の地区でどのように立ち上げるのか。神奈川区社協の富井亨事務局長は、最後に次のように語ってくれた。

「羽沢プロジェクトは、個性あふれるメンバーの魅力が見事に結集した最高の成功事例。しかし、同じことをほかの地区でもできるとは限りません。地区には、それぞれの特性があります。それをしっかり見極めながら、活動をすすめることが重要ですね。その地区に合った住民主体による社会的孤立者への支援活動が誕生するように、神奈川区社協は積極的にバックアップしたいと思います」

後列右から、神奈川区社協・富井事務局長、梅木主事
前列右から、羽沢地区民児協・長谷川会長、羽沢地区自治連合会・和田副会長、羽沢地区社協・平山会長、羽沢地区自治連合会・岐部会長

神奈川区（神奈川県横浜市）

横浜市を構成する18区のうちのひとつ。江戸時代から東海道の宿場(神奈川宿）として栄えた。現在は沿海部が超高層マンションが建ち並ぶ住宅街、山側は一面に畑が広がる農村地帯とふたつの異なった表情をもつ。山側で収穫される横浜キャベツは、市内一の収穫量を誇っている。